かなでほんちゅうしんぐら

仮名手本忠臣蔵

〔解　説〕

寛延元年（一七四八）八月、竹本座初演。竹田出雲・三好松洛（しょうらく）・並木千柳（なみきせんりゅう）の合作。八月十四日から十一月まで打ち続ける程、当初から人気が高かった。言うまでもなく赤穂浪士の仇討ちを脚色したもので、同じ題材を扱った数多くの先行作品の集大成であり、「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」と共に三大浄瑠璃の一つに数えられている。

元禄十四年（一七〇一）三月十四日、勅使響応の際、江戸城松の廊下で、浅野内匠頭が吉良上野介を刃傷に及んだ事件から、元禄十五年十二月十四日の討入りまでを一年に凝縮し、春夏秋冬に配列したのも心憎い脚色である。時代を足利時代に、場所を鎌倉に置き換え、登場人物も、浅野内匠頭を塩治（えんや）判官、吉良上野介を高師直（もろのう）、大石内蔵助を大星由良之助（ゆらのすけ）などと、太平記の世界をとってつけており、また、それは幕府の検閲を逃れるための手段でもあった。

本筋の義士劇の他に、若狭之助、本蔵、勘平、天河屋（あまかわや）の件が発生し、世話場・道行等を交え、もっぱら首尾を整えている。討入りの事実と戯曲的内容を巧妙に一致させた名曲である。

〔あらすじ〕

《大　序》

暦応元年(一三三八)二月下旬、鶴ヶ丘八幡宮の造営が成就したので、足利将軍尊氏の弟・直義は、兄の代参として鎌倉へ下向、新田義貞が討死の時に着用していた兜を宝蔵に納めることになった。塩冶判官の妻、顔世が召され、四十七の兜のうちより、義貞のものを見分ける。

直義と、このたびの響応役、塩冶判官・桃井若狭之助は、兜を宝蔵に納めに行く。後に残った指南役、高師直は、艶書を渡して顔世を口説くが、戻ってきた若狭之助の機転により、顔世はその場を逃れることができた。怒った師直は若狭之助を罵倒、若狭之助はかろうじて憤りを抑える。

《二段目》

桃井家の奥座敷。若狭之助は、家老・加古川本蔵に、昨日の無念を晴らすため、明日は師直を討つ決心だとうち明ける。老功な本蔵は逆らわず、縁先の松の枝を伐って「まっこの通りさっぱりと遊ばせ」と述べる。

《三段目》

正七つ時(午前四時)の登城に先がけ、西の御門で師直に追いついた本蔵は、進物を山と並べて首尾よく師直の機嫌を取り結ぶ。師直の勧めで本蔵も門内に入る。やや遅れて、塩冶判官が早野勘平を供に登城。腰元おかるは、顔世から師直への文箱を届けに来る。勘平は判官から師直に渡せばよいと、おかるを待たせて奥に入る。

「おのれ師直、真二つ」と意気ごむ若狭之助の前に現れた師直は、前日とはうって変わって低姿勢。金が言わせた追従とは夢にも知らぬ若狭之助は、すっかり拍子抜けして、刀を抜くことができなかった。

さて、判官が顔世からの文箱を師直に手渡すと、中には新古今の歌。師直は恋のかなわぬしるしと悟り、判官に散々当てこすりを言う。判官は腹にすえかね、師直に斬りつけてしまう。判官を抱きとめたのは、次の間に控えていた本蔵であった。

館の騒動に、勘平は急ぎ裏門へ。判官が閉門を仰せつけられ、網乗物にて帰ったと聞き、動顛する。おかるとの逢瀬を楽しんで、主人の大事に居合わせなかったことを恥じ、切腹しようとするが、おかるに止められ、おかるの在所、山崎へと落ちてゆく。

《四段目》

閉門中の判官のもとへ、上使、石堂馬之丞と薬師寺次郎左衛門が「国郡を没収し、切腹」との上意を伝えに来る。かねて覚悟していた判官が、刀を腹へ突き立てたところへ、国家老、大星由良之助が駆けつける。判官は「この九寸五分は汝へ形見、我が鬱憤を晴らさせよ」と息絶える。家来一同は、亡骸を菩提寺光明寺へと送り、斧九太夫ら不忠の者を除いて仇討ちの盟約をして城を明け渡す。

《五段目》

山崎で猟師をしながら帰参の時機を待っていた勘平は、夜の街道筋で朋輩千崎弥五郎に出会い、主君の石塔建

立の計画を聞き、御用金を調える事を約して別れた。

百姓与市兵衛は娘おかるを祇園へ売る約束をして得た半金五十両を懐にしての帰途、斧九太夫の倅、定九郎に金を奪われ、刺し殺される。そこに猪が通りかかり、それを狙った鉄砲が定九郎のあばらを貫いた。勘平は猪を打ちとめたと暗がりを手で探るとそれは人間であった。手に触れた財布を天の与えと押しいただき、千崎に届けようと後を追った。

《六段目》

勘平が家に帰ると、祇園町から一文字才兵衛がおかるを迎えに来ていた。自分のために遊女となる女房と両親の志を有難く思ったが、舅の与市兵衛はまだ帰らず、その時借りたという財布が、昨夜の旅人のものと同じなので勘平は苦悶した。おかるは別れを惜しんで連れて行かれる。

そこへ猟人仲間が与市兵衛の死骸をかつぎこんできた。勘平が驚く様子もないので、もしやと思い、母は色々と尋ね、懐に手を入れると、血の付いた財布が出る。勘平は返す言葉もなく畳に伏して泣いた。そこへ原郷右衛門と千崎弥五郎が、主君に不忠をした者の金は使えないと、石塔料を返しに来た。母は天罰であると二人に舅殺しを訴えた。たまりかねた勘平は腹に刀を突き立て、ゆうべの事情を物語る。しかし、死骸を調べると鉄砲傷はなく、結果的に勘平は定九郎を撃って、親の仇討ちをしたことがわかる。勘平は徒党の連判に加えられ、血判して息絶える。

《七段目》

大星由良之助は祇園の一力で遊蕩に耽っていた。血気の若侍が煽っても、足軽の寺岡平右衛門がお供にと嘆願しても、全く他愛なく酔いつぶれている。そこへ由良之助の息子・力弥が、判官の妻・顔世からの密書を届けに来る。あたりを見回して密書を読んでいると、縁の下からは九太夫が、二階からは、おかるが盗み読んでいた。由良之助はそれに気づき、おかるの身請け話をきめる。そこへおかるの兄平右衛門が来合わせ、おかるの話を聞くうちに由良之助の真意を悟り、手紙を盗み読んだ科によっておかるを斬り、それを手柄に連判に加わろうとする。おかるは兄の口から、父・与市兵衛と、夫・勘平の死を聞かされ、命はいらぬと覚悟したところへ、由良之助があらわれ、平右衛門にはお供をすることを許し、おかるには夫に代わり、縁の下の九太夫を討たせる。

《八段目》

加古川本蔵の娘・小浪は、由良之助の息子・力弥と許嫁の仲であった。由良之助一家が山科に住んでいること知って、継母・戸無頼と二人きり、供も連れず山科へと旅を続ける。

《九段目》

雪の山科、由良之助の閑居へ、戸無頼と小浪が到着する。由良之助の妻・お石は愛想良く出迎えはするが、賄賂を贈るような追従者の娘と、二君に仕えぬ由良之助の大事な子とは釣り合わないと、破談を言いわたす。思い余った母娘が死のうとするのをお石は止めて、祝言をさせたければ本蔵の首をと所望する。本蔵が抱きとめたば

かりに、判官は本望を遂げられなかった。その恨みの本蔵の首を婿引出にと迫る。母娘が再び途方にくれる所へ虚無僧姿に身をやつした本蔵が現れ、わざと力弥の手にかかる。本蔵の本心を見ぬいた由良之助に小浪の祝言を頼み、師直屋敷の絵図面を渡して死んでゆく。

《十段目》

堺の商人・天河屋義平は、召し使いも女房もよそへ出し、一人で討入りの諸道具を調達している。由良之助は、同士の疑念をはらすため、同士を捕手として入りこませ、義平を糾明するが、頑として明かさない。由良之助はそれを賞して「天河」を討入りの際の合い言葉と決め、鎌倉へと向かう。

《十一段目》

一同は、稲村ヶ崎に上陸し、雪の中、鎌倉の師直邸へ討入る。由良之助は、判官形見の短剣で師直の首をかき、亡君の位牌に供え、焼香する。一同は、菩提寺光明寺へと引き上げる。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

（一般社団法人　義太夫協会発行）

六段目　身売りの段

急ぎける。

所も名に負ふ山崎の小百姓、与市兵衛が埴生の住居、今は早野勘平が浪々の身の隠れ里。女房おかるは寝乱れし、髪取り上げんと櫛箱の、あかつきかけて戻らぬ夫。待つ間もとけし投げ島田、品よくしゃんと結ひ立てしは、在所に惜しき姿なり。母の齢も杖つきの、野道とぼとぼ立ち帰り、

「ヲヽ、娘、髪結やったか。美しうよう出来た。イヤもう在所はどこもかも麦秋時分で忙しい。今も藪際で若い衆が麦かつ歌に、『親仁出て見やばゞんつれて』と唄ふを聞き、親仁殿の遅いが気にかゝり、在口まで行たれど、ようなふ影も形も見えぬ」

「サイナ。こりゃまあどふして遅い事ぢゃ。わし一走り見て来やんしょ」

「イヤなふ、若い女の一人歩くはいらぬ事。殊にそなたは小さい時から、在所を歩く事さへ嫌ひで、塩冶様へ御奉公にやったれど、どふでも草深い所に縁があるやら戻りゃったが、勘平殿と二人居やればおとましい顔も出ぬ」

「ヲヽ、母様のそりゃ知れた事。好いた男と添ふのぢやもの。在所はおろか、どんな貧しい暮らしでも苦にならぬ。やんがて盆になって、『と様出て見やかゝんつ、かゝん連れて』といふ唄の通り、勘平殿とたった二人、踊り見に行きやんしょ。母様、お前も若い時、覚えがあろ」

と差合ひくらぬぐはら娘、気もわさわさと見えにける。

「イヤノウ、何ぼそのやうに面白をかしう云やっても、心の中はの」

「イヱイヱ、済んでござんす。主の為に祇園町へ勤め奉公に行くは、予て覚悟の前なれど、年寄って父様の世話やかしゃんすが」

「そりゃ云やんな。小身者なれど兄も塩冶様の御家来なれば、外の世話するやうにもない」

と、親子話の中道伝ひ、駕籠を舁かせて急ぎ来るは、祇園町の一文字屋。

「サアサア駕籠の衆ござれ。ヱヽこうつと、確かこの松の木から、一軒二軒三軒め。ヲヽ、こゝぢやこゝぢや」

と門口から、

「与市兵衛殿内にか」

と云ひつゝはいれば、

「これはまあまあ遠い所を。ソレ娘、煙草盆。お茶上げましゃ」

と親子して、槌でお家を白人屋の亭主。

「さて、昨夜はこれの親仁殿もいかゐ大儀。別条なう戻られましたかな」

「ヱヽ。さては親仁殿と連れ立って来はなされませぬか。これはしたり。お前へ行てから今において」

「ヤア、戻られぬかへ。ハテ面妖な。ハヽア、もし稲荷前をぶらついて、かの玉殿につまゝりゃせぬかの。アヽコレ、この中こゝへ見に来て極めた通り、お娘の年も丸五年切、給銀は金百両。さらりと手を打った。ガこれの親仁が云はるゝには、今夜中に渡さねばならぬ金あれば、今晩証文を認め、百両の金子お貸しなされて下されと、涙をこぼしての頼み故、証文の上で半金渡し、残りは奉公人と引替への契約。何がその五十両渡すとの、悦んで戴き、ほたほた云ふて戻られたはもふ四ツでもあらふかい。夜道を一人、金持っていら

ぬものと留めても聞かず戻られたが、但しは道に」
「イヱイヱ寄らしゃる所は、なふ母様」
「ないともないとも。殊に一時も早うそなたやわしに金見せて悦ばさふとて、いきせきと戻らしゃる筈ぢゃに、合点がいかぬ」
「イヤコレ、合点のいくいかぬはそっちの穿鑿。こっちはさがりの金渡して、奉公人を連れていの」
と、懐より金取り出し、
「後金の五十両。これで都合百両。サア渡す。受け取らしゃれ」
「お前、それでも親仁殿の戻られぬ中は、なふかる、わが身はやられぬ」
「ハテぐずぐすぐずぐずすと埒の明かぬ。コレぐっともすっとも云はれぬ与市兵衛の印形。証文が物云ふはいのふ証文が。今日から金で買い切った体。一日違へばれこづゝ違ふ。どふでかうせざ済むまい」
と手を取って引っ立つる。
「マアマア待って」
と取り付く母親突き退け刎ね退け、無体に駕籠へ押し込み押し込み、舁き上ぐる門の口、鉄砲に蓑笠打ち掛け戻りかゝって見る勘平。つかつかと内に入り、
「駕籠の内なは女房共。こりやマアどこへ」
「ヲヽ勘平殿。よい所へよう戻って下さった」
と、母の悦びその意を得ず。
「どふでも深い訳があろ。母者人女房共、様子聞かふ」
とお上の真中、どっかと座れば、文字の亭主。
「ハヽア、さてはこなたが奉公人の御亭ぢゃの。譬へ御亭が布袋が弁天が大黒でも、『云号の夫などゝ、脇より違乱、妨げ申す者無之候』と、親仁の印形あるからは、こちには構はぬ。早う奉公人を受け取らふかい」

「ヲヽ、聟殿、合点がいくまい。予てこなたに金のいる様子、娘の話で聞いた故、どふぞ調へて進ぜたいと、云ふたばかりで一銭の当てもなし。そこで親仁殿の云はしゃるには、ひょっとこなたの気に、女房売って金調えうと、サよもや思ふてゞはあるまいけれど、もし二親の手前を遠慮して居やしゃるまいものでもない。いっそこの与市兵衛が聟殿に知らさず娘を売らふ。まさかの時は切取りするも侍のならひ。女房売っても恥にはならぬ。お主の役に立つる金、調へておましたらまんざら腹も立つまいと、昨日から祇園町へ折極めにいて、今に戻らしゃれぬ故、親子案じている中へ、親方殿が見えて、昨夜親父殿に半金渡し、後金の五十両と引替へに娘を連れていなふ、と云ふてなれど、親仁殿に逢ふての上、と訳を云ふても聞き入れず、今連れていなしゃる所。どふせうぞ勘平殿」

「ハヽ。これはこれは、先づ以って舅殿の心遣ひ忝い。したが、こちにもちっとよい事があれども、それは追って。イヤコレ、親仁殿も戻られぬに女房共は渡されまい」

「とは何故に。とは何故に。」

「ハテ云はゞ親なり判がゝり。尤も昨夜半金の五十両渡された、でもあらふけれど」

「アヽコレイノコレ。京大坂を股にかけ、女護の島程奉公人を抱へる一文字屋。渡さぬ金を渡した、と云うて済むものかいの、コレ済むかいの。まだ、まだまだその上に確かな事があるてや。ヱヽこれの親仁が、かの五十両といふ金を、手拭にくるくると巻いて懐に入れらるゝ。『アヽそりゃ危ない、そりゃ危ない。これに入れて首にかけさっしゃれ』と、俺が着ている、カウ、カウカウこの一重物の縞の布で拵えた金財布貸したれ

ば、やんがて首にかけて戻られう」
「ヤア何と。こなたが着ているこの縞の布の金財布か。」
「ヲヽてや」
「あの、この縞でや」
「何と、確かな証拠であらふがの」
聞くよりはっと勘平が肝先にひしと応え、傍辺りに目を配り袂の財布見合はせば、寸分違はぬ糸入縞。『南無三宝。さては昨夜鉄砲で打ち殺したは舅であったか。ハアはっ』と我が胸板を二ツ玉で打ちぬかるゝよりせつなき思ひ。とは知らずして女房、
「コレこちの人。そはそはせずと、やるものかやらぬものか、分別して下さんせ」
「ヲヽ成程。ハテもふ、あの様に確かに云はるゝからは、行きゃらずばなるまいかい」
「アノ、父様に逢はいでもかへ」
「アヽイヤイヤ。親仁殿にも今朝ちょっと逢うた。が戻りは知れまい」
「フウそんなりゃ父様に逢うてかへ。それならそふと云ひもせで、母様にもわしにも案じさせてばっかり。」と云ふに文字も図に乗って、
「ソレ見やしゃれいの。七度尋ねて人疑へぢゃ。親仁の在所の知れたので、そっちもこっちも心がよい。まだこの上にも四の五のあれば、いやともにでんど沙汰。まあまあさらりと済んでめでたいめでたい。イヤコレ、お袋も御亭も六条参りしてちと寄らしゃれ。サアサアお娘、駕籠に乗りゃ駕籠に乗りゃ、早ふ乗りゃ」
「アイアイ。これ勘平殿、もふ今あっちへ行くぞへ。年寄った二人の親達、どふでこな様のみんな世話。取り分けて父様はきつい持病。気を付けて下さんせ」と。親の死目を露知らず、頼む不憫さいぢらしさ。『い

っそ打ち明けありのまゝ、話さんにも他人あり』と、心を痛め堪(こた)え居る。

「ヲヽ聟殿。夫婦の別れ暇(いとま)乞ひがしたかろけれど、そなたに未練な気も出よかと思ふての事であろ」

「イヱイヱ。何ぼ別れても、主(ぬし)の為に身を売れば、悲しうも何ともない。わしゃ勇んで行く、母様(かかさん)。したが、父様(とっさん)に逢はずに行くのが」

「ヲヽ、それも戻らしゃったら、つゐ逢ひに行かしゃろぞいの。煩はぬ様に灸据えて、息災(そくさい)な顔見せに来てたも。ヤア」

「アイ」

「ヤア」

「アイ」

「ヤアヤアヤア。鼻紙扇もなけりゃ不自由な。何にもよいか。とばついて怪我しやんな」

と、駕籠に乗るまで心を付け、

「さらばや」

「さらば」

「何の因果で人並みな娘を持ち。この悲しい目を見る事ぢゃ」

と、歯を喰ひしばり泣きければ、娘は駕籠にしがみ付き、泣くを知らさじ聞かさじと、声をも立てずむせかへる。情なくも駕籠舁き上げ、道を

（早めて急ぎ行く）

六段目　勘平腹切の段

我が家へ立ち帰る。

母は涙の隙よりも、勘平が傍へ差し寄つて、

「コレ婿殿、よもや、よもや、よもや、とは思へども合点が行かぬ。なんぼ以前が武士ぢやとて、舅の死目見やしやつたらびつくりもしやる筈。こなた、道で逢うた時金受取りはさつしやれぬか。親仁殿が何と言はれた、サ言はつしやれ、言はつしやれ。サ何と、どうも返事はあるまいがの。ない証拠は、コレこゝに」

と、勘平が懐へ手を差し入れて引き出だすは、

「さつきにちらりと見ておいたこの財布。コレ、この様に血の付いてあるからは、こなたが親仁殿を殺したの」

「ヤ、それは」

「それはとは、それはとは、エヽわごりよはなう。隠しても隠されぬ、天道様が明らかな。親仁殿を殺して取つたその金や、誰に遣る金ぢや。聞こえた。身貧な舅、娘を売つたその金を、中で半分くすねておいて、皆遣るまいかと思ふてコリヤ、殺して取つたのぢやなア。今といふ今迄、律儀な人ぢやと思うて、騙されたが腹が立つわい。エヽこゝな人でなし、あんまり呆れて涙さへ出ぬわいやい。なう愛しや与市兵衛殿、畜生の様な婿とは知らず、どうぞ元の侍にしてやりたいと、年寄つて夜も寝ずに、京三界を駆け歩き、珍財を投げうつて世話さしやつたも、かへつてこなたの身の仇となつたるか。飼ひ飼ふ犬に手を喰はるゝと、ようもようもこの様に、惨たらしう殺された事ぢやまで。コリヤこゝな鬼よ蛇よ、父様を返せ、親仁殿を生けて戻せやい」

と、遠慮会釈もあら男の、髻を掴んで引き寄せ引き寄せ叩き付け、
「づづづだに切りさいなんだとて、これで何の腹が癒よ」
と、恨みの数々口説き立て、かつぱと伏して泣きゐたる。身の誤りに勘平も、五体に熱湯の汗を流し、畳に喰ひ付き天罰と、思ひ知つたる折こそあれ。
深編笠の侍二人、
「早野勘平在宿をし召さるゝか、原郷右衛門、千崎弥五郎、御意得たし」
と訪へば、折悪けれども勘平は、腰ふさぎ脇挟んで出で迎ひ、
「これはこれは御両所共に見苦しきあばら家へ御出で、忝なし」
と、頭を下ぐれば郷右衛門、
「見れば家内に取り込みもあるさうな」
「アヽイヤ、もう些細な内証事。御構ひなくともいざまづあれへ」
「然らば左様に致さん」
と、ずつと通り座に着けば。二人が前に両手を付き、
「この度、殿の御大事に外れたるは拙者が重々の誤り、申し開かん詞もなし。何卒某が科御許しを蒙り、亡君の御年忌、諸家中諸共相勤むる様に、御両所の御取り成し、偏へに頼み奉る」
と、身をへり下り述べければ。郷右衛門取りあへず、
「まづもつてその方、貯へなき浪人の身として、多くの金子御石碑料に調進せられし段、由良助殿甚だ感じ入られしが、石碑を営むは亡君の御菩提、殿に不忠不義をせしその方の金子を以て、御石碑料に用ひられんは、御尊霊の御心にも叶ふまじとあつて、ナソレ金子

は封の儘相戻さるゝ」
と、詞の中より弥五郎懐中より金取り出だし、勘平が前に差し置けば、『ハツ』とばかりに気も顛倒(てんどう)、母は涙と諸共に、
「コリヤこゝな悪人面、今といふ今、親の罰思ひ知つたか。ハイ、皆様も聞いて下さりませ。親仁殿が年寄つて後生の事は思はず、婿の為に娘を売り、金調へて戻らしやるを待ち伏せして、アヽアレあの様に殺して取つた金ぢやもの、天道様がなくば知らず、何で御用に立つものぞ。親殺しの生き盗人に罰を当てゝ下されぬは、神や仏も聞こえませぬ。あの不孝者、御前方の手に掛けて、なぶり殺しにして下され。わしや腹が立つわいの」
と、身を投げ伏して泣きゐたる。聞くに驚き両人刀追つ取つて弓手馬手に詰め掛け詰め掛け、弥五郎声を荒らげ、
「ヤイ勘平、非義非道の金取つて身の科の詫びせよとは言はぬぞよ。わが様な人非人、武士の道は耳にも入るまい、親同然の舅を殺し、金を盗んだ重罪人は大身槍の田楽刺し、拙者が手料理振舞はん」
と、はつたと睨めば郷右衛門、
「渇しても盗泉の水を飲まずとは義者の戒め。舅を殺し取つたる金、亡君の御用金になるべきか。生得汝が不忠不義の根性にて、調へたる金と推察あつて、突き戻されたる由良助殿の眼力、ハヽ天晴れ天晴れ。さりながら、ハア情けなきはこの事世上に流布あつて、塩谷判官の家来早野勘平、非義非道を行ひしといはゞ、汝ばかりが恥ならず、亡君の御恥辱と知らざるか。こなこな、こなこなこな、うつけ者めが。勘平、コレサ勘平、御身はどうしたものだ。左程の事の弁へなき、

汝にてはなかりしが、いかなる天魔が魅入りし」
と、鋭き眼に涙を浮かめ、事を分け理を責むれば、堪り兼ねて勘平諸肌押し脱ぎ脇差を、抜くより早く腹へぐつと突き立て、
「ム、いづれもの手前面目もなき仕合はせ、拙者が望み叶はぬ時は切腹と兼ねての覚悟、わが、わが舅を殺せし事、亡君の御恥辱とあらば一通り申し開かん、両人共にまづ、まづまづ、まづまづまづ聞いてたべ。夜前弥五郎殿の御目に掛かり、別れて帰る暗紛れ、山越す猪に出合ひ、二つ玉にて撃ち留め、駆け寄つて探り見れば、猪にはあらで旅人、南無三宝誤つたり。薬はなきかと懐中を探し見れば、財布に入つたるこの金。道ならぬ事なれども、天より我に与ふる金とすぐに馳せ行き、弥五郎殿にかの金を渡し、立ち帰つて様子を聞けば、撃ち止めたるは、撃ち止めたるは、わが舅。金は女房を売つた金、か程迄する事なす事、いすかの嘴(はし)程違ふといふも、武運に尽きたる勘平が、身の成り行き推量あれ」
と、血走る眼に無念の涙。子細を聞くより弥五郎ずんど立ち上り、死骸引き上げ打返し、『ムウ、ム』と疵口改め、
「郷右衛門殿これ見られよ、鉄砲疵には似たれどもこれは刀で抉つた疵。勘平早まりし」
と、言ふに手負も見てびつくり、母も驚くばかりなり。郷右衛門心付き、
「イヤコレ千崎殿、アヽこれにて思ひ当つたり。御自分も見られし通り、これへ来る道端に鉄砲受けたる旅人の死骸、立ち寄り見れば斧定九郎。強欲な親九太夫さへ、見限つて勘当したる悪党者。身の佇みなき故に、山賊すると聞いたるが、疑ひもなく勘平が、舅を討つ

たは彼奴が業(わざ)」
「エヽ、そんなりやアノ親仁殿を殺したは、他の者でござりますか。ハア」
『ハツ』と母は手負に縋り、
「コレ、手を合はして拝んます。年寄りの愚痴な心から恨み言ふたは皆誤り、堪へて下され勘平殿、必ず死んで下さるな」
と泣き詫ぶれば、顔振り上げ、
「只今、母の疑ひもわが悪名も晴れたれば、これを冥途の思ひ出とし、後より追付き舅殿、死出三途を伴はん」
と、突込む刀引廻せば、
「アヽ暫く暫く。思はずもその方が舅の敵討つたるは、未だ武運に尽きざるところ。弓矢神の御恵みにて、一功立つたる勘平、息のあるうち郷右衛門が、密かに見する物あり」
と、懐中より一巻を取り出だし、さらさらと押し開き、
「この度、亡君の敵高師直を討ち取らんと神文を取り交し、一味徒党の連判かくの如し」
と、読みも終らず苦痛の勘平、
「シテその姓名は、誰々なるぞ」
「オヽ徒党の人数は四十五人、汝が心底見届けたれば、その方を差し加へ一味の義士四十六人。これを冥途の土産にせよ」
と、懐中の矢立取り出だし姓名を書き記し、
「勘平、血判」
「オヽ心得たり」
と、腹十文字に掻き切り、臓腑を掴んでしつかと押し、
「サ血判、仕つた」
「アヽコリヤ乗るな、乗るな。早野勘平繁氏、確かに

血判相済んだぞ」
「チエヽ忝なや有難や。わが望み達したり。母人、嘆いて下さるな。舅の最期も女房の奉公も、反古にはならぬこの金、一味徒党の御用金」
と、言ふに母も涙ながら、財布と共に二包み、二人が前に差し出だし。
「勘平殿の魂の入つたこの財布、婿殿ぢやと思うて敵討の御供に連れてござつて下さりませ」
「オヽ成程、尤もなり」
と、郷右衛門金取り納め、
「思へば思へばこの金は、縞の財布の紫摩黄金、仏果を得よ」
と言ひければ、
「ヤア仏果とは穢らはし、死なぬ死なぬ。魂魄この土に留まつて、敵討ちの御供する」
と、言ふ声も早四苦八苦、『惜しや不憫』と両人が、浮む涙の玉の緒も、切れてはかなくなりにけり。
「ヤア、ヤアヤア、もう婿殿は死なしやつたか。さてもさても世の中に、俺が様な因果な者が又と一人あらうか。親仁殿は死なつしやる、頼みに思ふ婿を先立て、いとし可愛いの娘には生き別れ、年寄つたこの母が一人残つてこれがマア、何と生きてゐられうぞ。コレ親仁殿、与市兵衛殿、俺も一緒に連れて往て下され」
と、取り付いては泣き叫び、また立ち上つて、
「アヽコレ婿殿、母も共に」
と、縋り付いては伏し沈み、あちらでは泣きこちらでは『わつ』とばかりにどうど伏し、声をはかりに嘆きしは、目も当てられぬ次第なり。郷右衛門突立ち上がり、
「これこれ老母、嘆かるゝは理りなれども、勘平が最

期の様子、大星殿に詳しく語り、入用金手渡しせば満足あらん。首に掛けたるこの金は、婿と舅の七七日（ななぬか）。四十九日や五十両、合はせて百両百ケ日の追善供養、後懇ろに弔はれよ。さらば、さらば」

「おさらば」

と、見送る涙見返る涙、涙の浪の立ち帰る、人もはかなき次第なり。

七段目　一力茶屋の段

月の入る。山科よりは一里半、息を切つたる嫡子力弥、内を透かして正体なき父が寝姿、起こすも人の耳近しと、枕元に立ち寄つて、轡に代はる刀の鍔音、鯉口

「ヤア力弥か、鯉口の音響かせしは急用あつてか、密かに〳〵」

「只今御台顔世様より急の御飛脚密事の御状」

「他に御口上はなかつたか」

「敵……」

「ヘ敵と見へしは群れ居る鴟、時の声と聞こへしは。アヽ大きな声ぢや、密かに密かに」

「敵高師直、帰国の願ひ叶ひ、近々本国へ罷り帰る。委細の儀は御文との御口上」

「よし、よし。その方は宿へ帰り、夜の中に迎ひの駕篭。行け〳〵」

「ハヽ」

はっとためらふ隙もなく、山科さして引返す。

折に二階へ、勘平が妻のおかるは酔ひ醒まし、早廓馴れて吹く風に、憂さを晴らしてゐる所へ

「ちよと往て来るぞや。由良助ともあらう侍が、大事の刀を忘れて置いた。つい取つて来るその間に、掛物も掛け直し、炉の炭もついで置きや。アヽそれ〳〵〳〵、こちらの三味線踏み折るまいぞ。これはしたり、九太はもふ去なれたさうな」

あたり見廻し由良助、釣燈篭の明りを照らし、読む長文は御台より敵の様子細々と、女の文の後や先、参らせ候ではかどらず、余所の恋よと羨ましく、おかるは上より見下ろせど、夜目遠目なり字性もおぼろ、思

ひ付いたる延べ鏡、出して写して読み取る文章、下家よりは九太夫が、繰り下ろす文月影に、透かし読むとは、神ならず、ほどけかゝりしおかるが簪、バツタリ落つれば、下には『ハツ』と見上げて後へ隠す文、縁の下にはなほ笑垂、上には鏡の影隠し

「由良さんか」

「おかるか。そもじはそこに何してぞ」

「わたしやお前に盛り潰され、あんまり辛さに酔ひ醒まし。風に吹かれてゐるわいな」

「ハテなう。よう風に吹かれてぢやの。イヤかる、そもじにちと話したい事がある。屋根越しの天の川でこゝからは言はれぬ。ちよつと下りてたもらぬか」

「話したいとは、頼みたい事かえ」

「マアそんなもの」

「廻つて来やんしよ」

「イヤイヤ、段梯子へ下りたらば、仲居が見つけて酒にせう。アヽどうせうな。アヽコレコレ、幸ひこゝに九つ梯子、これを踏まへて下りてたも」

と、小屋根に掛ければ

「この梯子は勝手が違うて、オヽ恐。どうやらこれは危いもの」

「大事ない、〳〵。危ない恐いは昔の事、三間づゝまたげても赤膏薬も要らぬ年配」

「阿呆言はんすな。船に乗つた様で恐いわいな」

「道理で、船玉様が見える」

「ヲヽ覗かんすないな」

「洞庭の秋の月様を、拝み奉るぢや」

「イヤモウ、そんなら降りやせぬぞえ」

「降りざ降ろしてやろ」

「アレまた悪い事をアレアレ」

「喧(やかま)しい〳〵、生娘か何ぞの様に、逆縁ながら」
と後より、ぢつと抱きしめ、抱き降ろし。
「何とそもじは、御覧じたか」
「アイ、いいえ」
「見たであろ、〳〵」
「何ぢややら面白さうな文」
「アノ、上から皆読んだか」
「オヽくど」
「アヽ身の上の大事とこそはなりにけり」
「何の事ぢやぞいな」
「何の事とはおかる、古いが惚れた、女房になつてたもらぬか」
「おかんせ、嘘ぢや」
「サ嘘から出た真でなければ根が遂げぬ。応と言や、〳〵」
「イヤ、言ふまい」
「なぜ」
「お前のは嘘から出た真ぢやない。真から出た、皆嘘」
「おかる、請け出さう」
「エヽ」
「嘘でない証拠に、今宵の中に身請けせう」
「イヤアノ、わしには」
「間夫があるなら添はしてやろ」
「そりやマアほんかえ」
「侍冥利。三日なりと囲うたら、それからは勝手次第」
「ハア嬉しうござんす、と言はして置いて笑おでの」
「イヤ、直ぐに亭主に金渡し、今の間に埒(らち)させう。気遣ひせずと待つてゐや」
「そんなら必ず待つてゐるぞえ」
「金渡して来る間、どつちへも行きやるな。こりや女

房ぢやぞ」
「それもたつた三日」
「それ合点」
「エヽ忝うござんす」
「どりや、金渡して来うか」
「アヽ騒ぐは〳〵。さすがは花の祇園町、テモにぎわしいこつたなあ。アヽなんとやらいうた、入相の鐘は廓の夜明けかな、とはよく言つたものだなアハヽヽヽヽ。それはさうとどうか首尾よう妹に逢ひたいもんだが、幸ひの女中、あゝこれ女中ちと物が尋ねたい。この郭に山崎辺からかるといふ女が勤め奉公に来て居る筈だが、御存知ならちょつと教えてくれねえか」
「今手の離されぬことがあるによって勝手へ往て訊いてくださんせいな」
「サア、なんだかしらねいが、勝手も勝手だが忙しさうだ。さう言はずと、どうかこう教えてくりょ」
「エヽ知らぬわいな」
「り、すげねえ女だな、マアさう言はずとちよつと教えてくれろ、御女中、どうか教えてくれろ、わりや妹でねえか」
「エヽお前は兄様、恥しい所で逢ひました」
と、顔を隠せば
「苦しうない、〳〵。関東よりの戻りがけ、母人に逢うて詳しく聞いた。お夫の為、主の為、よく売られた。でかした〳〵〳〵ナア」
「さう思ふて下さんすりや、わしや嬉しい。したがまあ喜んで下さんせ。思ひがけなう今宵請け出さるゝ筈」
「それは重畳。シテ何人のお世話で」
「お前も御存知の大星由良助様のお世話で」

「何ぢや、由良助殿に請け出される。それは下地からの馴染みか」
「なんのいな。この中より二三度酒の相手、夫があらば添はしてやろ、暇が欲しくば暇やろと、モ結構過ぎた身請け」
「さてはその方を早野勘平が女房と」
「イエ、知らずぢやぞえ。親夫の恥なれば、明かして何の言ひませう」
「ムウ、すりや本心放埒者。お主の仇を報ずる所存なねえに極まつたな」
「イエ〳〵、これ兄様、あるぞへ、〳〵」
「あるとは何が」
「サア、高うは言はれぬ。コレ、かう〳〵」
と、囁けば
「待て、〳〵〳〵〳〵ソーレ」
「あゝ〳〵〳〵」
「ムウ、すりやその文確かに見たな」
「残らず読んだその後で、互ひに見合はす顔と顔。それからぢやらつき出して、つい身請けの相談」
「アノ、その文残らず読んだ後で」
「アイナ」
「ムウ、それで聞こえた。妹、とても遁れぬそちが命、身どもにくれよ」
と、抜き打ちに、はつしと切れば、ちやつと飛び退き、
「コレ兄様、わしには何誤り。勘平殿といふ夫もあり、きつと二親あるからは、こな様のままにもなるまい。請け出されて親夫に、逢はうと思ふがわしや楽しみ。どんな事でも謝らう、許して下んせ、許して」
と、手を合はすれば平右衛門、抜身を捨てゝ、
「可愛や妹、わりや何も知らねえな。親与市兵衛殿は

六月廿九日の夜、人に切られてお果てなされた」
「ヤア、それはマア」
「コリヤ、びつくりするな、びつくりするな。まだ後にびつくりの親玉があるわい。われが請け出されて添はうと思ふ勘平はな」
「兄さん、勘平さんは」
「その勘平は」
「勘平さんは」
「勘平は、勘平で、やつぱり勘平だわい」
「なんのことじゃぞいな、きこえた、勘平さんにはよい女房さんでも出来たのかえ」
「エヽイ、そんな陽気な事ちやねえわい」
「そんなら兄さん、どうさしゃんしたえ」
「その勘平はな」
「勘平さんは〳〵」
「友朋輩の面晴れに、腹を切つて死んだわやい」
「エヽ、〳〵」
「アヽしまつた、コリヤ妹が目を廻した、てつきりこんなこってあろうと思ふた。誰かいねえか、仲居衆〳〵あー待て待て〳〵幸いの手水鉢、アヽ今兄が水をくれてやるぞ。ソリヤ水だ。おかるやい、妹やい、気が付いたか、しっかりしろ〳〵」
「オヽお前は兄さん」
「オヽ兄だ、平右衛門だ、面を見ろ〳〵」
「兄さん、勘平さんはどうやらじやあるかな」
「エヽ情けねえ、又尋ねるのかやい。我が受け出されその勘平はな、友朋輩の面晴れに、腹を切つて死んだわやい」
「ヤア〳〵〳〵それはマアほんかいな。コレのうのう」
と、取り付いて

「コレ兄さんどうせう」
「道理だ」
「どうせう」
「道理だ」
「どうせうどうせう、〳〵ぞいなあ」
「オヽ道理だ〳〵。様子話せば長い事、お痛はしいは母者人、言ひ出しては泣き、思ひ出しては泣き、娘かるに聞かしたら泣き死にするであろ、必ず言つてくれなとのお頼み。言ふまいとは思へども、とても遁れぬそちが命。サその訳は、忠義一途に凝り固まつた由良助様、勘平が女房と知らねば請け出す義理もなし。もとより色にはなほ耽けらず、見られた状が一大事、請け出だして刺し殺す思案の底と確かに見えた。よしさうのうても壁に耳、他より洩れてもその方が科(とが)、密書を覗き見たるが誤り、殺さにやならぬ。人手に掛けよりわが手に掛け、大事を知つたる女、妹とて許されずと、それを功に連判の、数に入つてお供に立たん。小身者の悲しさは、人に勝れた心底を、見せねば数には入れられぬ。聞き分けて祈ってくれ、死んでくれ、妹」と、事を分けたる兄の詞、おかるは始終せき上げ、せき上げ
「便りのないは身の代(しろ)を、役に立てゝの旅立ちか、暇乞ひにも見へそなものと、恨んでばつかりをりました。勿体ないが父さんは非業の死でもお年の上。勘平さんは〳〵三十になるやならずに死ぬるのは、さぞ悲しかろ、口惜しかろ、逢ひたかつたであらうのに、何故逢はせては下さんせぬ。親夫の精進さへ知らぬは私が身の因果、何の生きてをりませう。お手に掛からば母さんがお前をお恨みなされましよ。自害したその後で、首なりと死骸なりと功に立つなら功にさんせ。さらば

でござる兄さん」
と、言ひつゝ刀取り上ぐる
「ヤレ待て暫し」
と止むる人は由良助、『ハツ』と驚く平右衛門、おかるは
「放して殺して」
と、焦るを押へて、
「ソレ平右衛門、喰らひ酔うたその客に、加茂川でナ」
「いかゞ計らひませうか」
「水雑炊を喰らはせい」
「ハヽア」
「行け」
「ヤ、シテコイナ」